

平成 31 年 3 月 3 日

齋木 敏夫

1. 藤ノ木古墳の埋葬者はだれか

藤ノ木古墳(史跡)は法隆寺西院伽藍の西方約 350mに位置する直径 50mを超える大型の円墳だ。1985 年の第 1 次発掘調査で家形石棺、金銅製の馬具や装身具類が発見された。1988 年の第 3 次調査で家形石棺が開けられ、大刀や、耳輪・首飾り・沓といった装身具、大量のガラス玉とともに成人の遺骨 2 体が合葬された状態で発見された。一人は皇位を望み、物部守屋と結託したがそれに反する蘇我馬子により 587 年に殺害された穴穂部皇子でもう一人が弟の崇峻天皇と思われる。二人は厩戸皇子の叔父だ。玄室内の大量に出土した土師器、須恵器の年代から 6 世紀第 4 四半期の円墳であると推定されている。家形石棺、金銅製の馬具や装身具類、刀剣類などは国宝となっており、斑鳩文化財センターで主な出土品のレプリカが展示されている。日本書紀には蘇我馬子が東漢直駒(ヤマトノヤマトイマ)に命じて崇峻天皇を殺害し、倉梯岡(クラハシ)陵に葬ったと記されている。古墳近くにあった宝積寺(ホツツギ)の文書には崇峻天皇御廟と認識されおり、遺体は倉梯岡から移されたものと思われる。この寺は 1705 年に法隆寺末寺の宗源寺の管理となった。1854 年に焼失したが江戸時代には古墳の保護に重要な役割を果たしていた。法隆寺の高田長老が宗源寺庫裏の天井裏で江戸時代の古文書を見つけ、そこに藤ノ木古墳の図面や、古墳を守護するように建っていた宝積寺等の図面が含まれていたことを発見した。

2. 崇峻天皇の真の暗殺者はだれか

592 年天皇に猪を奉る者がいた。すると天皇は「この猪の首を落とすように憎い奴の首を落としたいものだ」といわれ、武器を集めさせ始めた。このことを知った蘇我馬子が天皇を討ったといわれている。これが真実であれば他の豪族が蘇我氏を没落させるチャンスであった筈なのに蘇我氏は罰せられていない。更に蘇我氏は推古天皇を即位させている。このことは藤原不比等が日本書紀により、乙巳の変で親の鎌足の行為を正当化する為に馬子を悪者にしたものであろうと思われる。実際は直駒が崇峻天皇弑逆した動機は恋人である河上娘を取り戻すことであったように思われる。直駒は恋人を奪った恋敵を殺した上で河上娘を取り戻し、彼女と駆け落ちしたのだ。この結果直駒は殺されてしまった。

3. 607 年初期法隆寺の設立の理由

(1.) 602 年に妃の膳大郎女(カワテノオオイラツメ)の実家がある所に斑鳩宮を造営した。その理由は難波の港に近く、大陸との外交に至便であることによるものと思われる。605 年に斑鳩宮に移り住み、その 2 年後の 607 年に法隆寺が完成した。この年遣唐使を派遣し、翌年唐の使いが来て伽藍を見た。

(2.) 用明天皇の意思をかなえるため。

銅造薬師如来坐像(国宝)の光背銘には「用明天皇が自らの病氣平癒の為薬師如来の造立を発願したが用明天皇がほどなく亡くなった為、遺志を継いだ推古天皇と厩戸皇子があらためて 607 年像と寺を完成した」という趣旨の記述がある。

606年厩戸皇子は推古天皇に「法華経」「勝鬘経」「維摩経」を進講したとされ、謝礼として播磨の鵜の荘をもらい、それを法隆寺に施入し維持費とした。

(3.) 「藤ノ木古墳」供養の為に造営？

厩戸皇子が崇峻天皇の遺骨を倉橋陵（桜井市）から移して追葬し、陵寺として法隆寺を造営した。

4. 643年 山背大兄皇子殺害の真犯人はだれか。

643年蘇我入鹿が巨勢徳多等の軍勢をさしむけ、斑鳩宮を攻め、上宮王家は滅亡させたことが日本書紀に記されているが蘇我氏と山背大兄王が不仲になった理由ははっきりしていない。乙巳の変の後の648年に巨勢徳多は罪滅ぼしの為か、法隆寺に食封300戸を施入している。このことは蘇我氏を滅ぼした後に中大兄が即位の邪魔となる山背大兄王殺害をした罪滅ぼしの為に命じたように思われる。

5. 670年に創建法隆寺は焼失、それ以前に現在の法隆寺を創建した人はだれか

建築様式などから金堂が最も古く、次いで五重塔が建てられたと思われる。金堂（国宝）には厩戸皇子の等身像といわれる国宝・釈迦三尊像をはじめ、多数の仏像が安置されている。金堂の「東の間」に安置される薬師如来坐像（国宝）の造立の様式は明らかに釈迦三尊像より新しい時代の様式だ。薬師如来坐像は創建法隆寺の本尊であったが670年に法隆寺が焼失した時以降に再建立され、後に前身の坐像の光背を踏襲し、法隆寺の由緒を示した刻銘が刻まれたと思われる。この像は持統天皇が造立させたのではないかと？現在の天蓋は鎌倉時代に作られたものだがそれとは別に天井裏に釘跡があり、軽い布製の天蓋があったようだ。この天蓋は奈良時代に作られた資材帳には持統天皇が寄進した旨の記録がある。天井板は年輪年代法により668年頃の伐採が確認されており、それ以前の着工と思われる。663年白村江の戦いに敗れ、唐、新羅の連合軍の侵攻を恐れた天智天皇は防御施設の建造と共に人気のある厩戸皇子を求心力として仏教による集権化を図るため創建した。そして本尊を厩戸皇子等身大の像と伝わる釈迦三尊像を安置したと思われる。現存の西院伽藍の建築を見ると細部の様式などから金堂がもっとも年代が古い。着工後に壬申の乱が起こり、混乱しておりようやく693年に法隆寺で仁王会が行われ、このころ迄には完成したものと思われる。五重塔がそれに続き、中門、回廊はやや遅れての建築と見られる。

6. 飛鳥時代に造られた釈迦三尊像、救世観音像がなぜ焼けずに残っているのか。

釈迦三尊像と救世観音像は斑鳩の宮の一部に建てられた瓦葺のお堂に祀られていたのではないかと推察、お堂は焼け残ったが荒廃しており、二体は新築の金堂に移された。実際にお堂に使われたと思われる瓦が東院伽藍の地から出土している。

7. 西院伽藍の建物と諸仏像

五重塔（国宝）

木造五重塔としては最古のものだ。屋根の逡減率（大きさの減少する率）が大きく五重目の屋根の一辺は初重の屋根の凡そ半分のサイズだ。初重の内部には東面・西面・南面・北面の4つの方角それぞれに塔本四面具と呼ばれる粘土で作られた群像が安置されている。文殊菩薩と維摩居士の問答、分舍利（釈尊の遺骨の分配）、弥勒の浄土、釈迦の涅槃がそれぞれの像によって表されている。

中門（国宝）

入母屋造の二重門で柱にはエンタシスが見られる。正面は四間二戸、日本の寺院の門は正面の柱間が奇数になるのが普通だがこの門は真中に柱が立つ点の特異である。門の左右に塑造金剛力士立像を安置する。日本最古の仁王像であるが風雨にさらされる場所にあり、何度も補修され、吽形像の体部は木造に代わっている。711年には五重塔初層安置の塑像群と中門安置の金剛力士（仁王）像が完成しており、同年頃までには五重塔、中門を含めた西院伽藍が建立されていたとみられる。

釈迦三尊像（国宝）

623年に止利仏師が造ったとする光背銘を有する像で仏教彫刻史の初頭を飾る名作である。光背銘はロストワックス法で造られており、後世に刻まれたものではない。図式的な衣文の処理、杏仁形の眼、アルカイックスマイル、太い耳朶（耳たぶ）、首に三道（3つのくびれ）を刻まない、北魏風の分厚い衣装など、後世の日本の仏像と異なった様式を示し、大陸風が顕著である。

四天王立像（国宝）

飛鳥時代の作。広目天・多聞天像の光背裏刻銘に山口大日費の作とある。同じ堂内の釈迦三尊像、薬師如来像が銅造であるのに対し、木造（楠）彩色である。後世の四天王像と違って、怒りの表情やポーズを表面にあらわさず、邪鬼の上に直立不動の姿勢で立つ。

観音菩薩立像（救世観音）（国宝）

飛鳥時代、木造。夢殿中央の厨子に安置する。長年秘仏であり、白布に包まれていた像で、明治初期に岡倉天心とフェノロサが初めて白布を取り、発見した像とされている。金堂には現在阿弥陀如来が安置されているがこれは鎌倉時代作で唯一台座部分のみが飛鳥時代作といわれている。宣字座（下段）の天板上面に64cmの丸い塗り残しがある。この台座に遺された痕が救世観音像の形と合っており、元は救世観音像を祀っていたことがわかった。

観音菩薩立像（百済観音）（国宝）

飛鳥時代の楠木造であり、名前に反して日本製だ。来歴不明であるが元は中宮寺にあったのではないかと。細身で九頭身の特異な像容で明治末頃まで虚空蔵菩薩と云われていたが宝冠が発見され、観音となった。大英博物館、東京国立博物館等に摸刻像があり、パリ、ルーブル美術館に出陳した。

観音菩薩立像（夢違観音）（国宝）飛鳥時代後期（白鳳期）、銅造。

童顔のあどけない顔で悪い夢を良い夢に変えてくれるという伝説のある像。

玉虫厨子（国宝）飛鳥時代。

もとは金堂に安置されていた仏堂形の厨子、建築様式的には法隆寺の西院伽藍よりやや古い時代を示し、飛鳥時代の建築、工芸の遺品として重要である。屋根が鋸茸（シロブキ）になっている。

透かし彫りの飾金具の下に本物の玉虫の羽を敷き詰めて装飾したことからこの名がある。現在、玉虫の羽は一部に残るのみで、当初の華麗さを想像するのはむずかしい。厨子の扉や壁面の装飾画も著名で、釈迦の前世物語である「捨身飼虎図」や「施身聞偈図」が特によく知られている。

阿弥陀三尊像及び厨子（橘夫人厨子）（国宝）飛鳥時代後期（白鳳期）

厨子内の阿弥陀三尊像は白鳳期の金銅仏の代表作で蓮池から生じた3つの蓮華の上に三尊像が表され、橘三千代の念持仏といわれる。

8. 再建、非再建論争の終結

1939年に現在の金堂の南東で塔と金堂の跡が南北に並んで見つかった。今も塔の礎石が見られる。2004年には壁画片見つかかり、一緒に出土した焼けた瓦が7世紀初めの飛鳥時代の様式であった。

この寺は670年に焼失した創建法隆寺であることが分かり、論争は終結したようだ。

9. 斑鳩三寺

1) 中宮寺

用明天皇の皇后穴穂部間人が建立した尼寺だと言われている。斑鳩宮を中央にして西の法隆寺と対照的な位置に創建された寺だ。その旧地は現中宮寺の東方500m位の所に有り、土壇が残っている。南に塔、北に金堂を配した四天王寺式配置伽藍で旧地若草伽藍と同様であったようだ。菩薩半跏像（国宝）は顔のほほ笑みはアルカイックスマイルとして高く評価され、エジプトのスフィンクス、ダ・ヴィンチ作のモナリザと並んで「世界三微笑像」とも呼ばれている。当初弥勒菩薩像として造立されたものと思われる。材質は楠木材で頭部は前後2材、胴体の主要部は1材とし、これに両脚部を含む1材、台座を形成する1材などを矧ぎ合わせ、他にも小材を各所に挟む。天寿国曼荼羅繡帳（国宝）は厩戸皇子の妃である橘大郎女が太子薨去の後凶像を創らせた最古の刺繍だ。

2) 法起寺(妙吉祥)

旧伽藍は金堂と塔が左右に並ぶが法隆寺西院の伽藍配置と逆であった。山背大兄王が岡本宮を寺に改めたのが始まりと伝えられている。683年金堂完成。法起寺が世界遺産に登録されるにあたり、呼び名を「ほうきじ」を正式とした。寺のシンボルは日本最古の三重塔で高さ24m、706年頃の完成とみなされている。初層・二層の柱間が3間、三層の柱間が2間という特殊な形式で法隆寺五重塔の五層と同様だ。

3) 法輪寺

7世紀中頃、山背大兄王が父を忍んで建てた寺、収蔵庫には飛鳥後期の作といわれる本尊 薬師如来坐像（重文）が安置されている。法隆寺の本尊に似た穏やかな笑みが見られる。楠の一木造で薬壺を持っていない。虚空蔵菩薩像（重文）も飛鳥時代末期にさかのぼる古像で楠の一木造だ。

終わりに

持統天皇と藤原不比等の時代になり、持統天皇の父天智天皇と不比等の父藤原鎌足を美化する為蘇我氏を悪者に してその業績をすべて厩戸の功績にし、日本書紀 に記した。そして厩戸の御棺も一年ほどかけて 立派なものを造り、葬り直した。その結果8世紀 中頃には聖徳太子と呼ばれるようになり、現在言われる聖徳太子信仰が広まったと思われる。

参考文献

法隆寺の歴史と信仰 高田 良信 小学館、

法隆寺を語る 高田 良信 柳原出版

国宝の美 飛鳥、白鳳の仏像 朝日新聞出版、

古代史再検証 所得太子とは何か 宝島社

仏教新発見 法隆寺 朝日新聞社、 魅惑の仏像 百済観音 毎日新聞社